
Let's 原作ブレイク

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Let's 原作ブレイク

【Zコード】

Z2479Z

【作者名】

キリ

【あらすじ】

第2のテンプレでチートな能力を得た元・平凡な少年は、原作ブレイクをしてハーレムを作る為に嬉々として『魔法先生ネギま！』の世界に転生する。

ぱい！【神様はいじられキャラ】（前書き）

初投稿作品です。楽しんで頂ければ幸いです。

せり！【神様はいじられキャラ】

気が付くと、真っ白な空間に居た。

重力等の概念は無いのだろう。俺の足は宙ぶらりん状態。分かり易く言えばそう、浮いている。

舞空術ですね分かります。

てか、舞空術開発した鶴仙人ってめっちゃ凄くね？主要キャラほどんど出来るから簡単そうに見えるけど、生身の人間が自在に空を飛び回れるんだぜ？簡単に出来ちゃダメだろ。

「おい」

金髪に変身出来るのに最初飛べなかつたキャラも居るしね。あ、いや、銃器少女の方でなく。

「おい！」

そういうや舞空術って氣を使って飛んでるらしいけど、氣が無いはずの人造人間ってどうやって飛んでるんだろ？エンジン？

「聞けや！……！」「うッ！」

「いっ……！神様、殴らないで下さい痛いです」

鈍痛のする頭をさすりながら、俺は不満げに目の前の男を見た。

男は右手で握り拳を作り、俺を見据えていた。

「無視するテメエが悪い。……てか、よく俺が神だつて分かつたな」

「そりや、まあ……」

『真つ白な空間 + 自分以外の人間 = 神』はテンプレだし。

はつーとこう事はまさか……

「……？まあ、良い。突然だがお前には異^s「異世界に転生するんですね！もちろん幾つかのチート能力を持つて！」……そつだ」

やつぱりチート転生！それってつまり俺——EEEEEEEEEが出来る

つて事だよな！

いやあ、男だつたら一度は憧れるつしょ。

「それで、転生させる理由、理由は神様が暇してた時に偶然俺が死んで、そうだコイツに凄え能力付けて漫画の世界とかに飛ばして原作ブレイクさせよう、みたいな感じですよね？」……

俺がチート転生物の第2のテンプレを言つたら神様は黙つてしまつた。何でだ？

あ、ちなみに第1のテンプレは、神のミスで死んでしまつた主人公が、生き返らせるのは無理だけど特典付けて転生させるから許して？なノリで剣と魔法の世界に送られる感じだ。

ぶつちやけ俺は、第1のテンプレはあんまり好きじゃない。

だって、貴方は私のミスで死にました、なんて言われたらハハツワ

口スな後に相手を殴り倒したくなるじゃん？相手神様だから無理だけど。

でもまあ、神様の土下座は見てみたいけどね。

あ、この場合の神様ってのは爺じやなく幼女の方だから。

口リコン？いいえ、口リもイケるだけです。

あれ？ そういう、こういう小説の主人公って大体ハーレム築くよな
……つて事は俺も！？

……無いな。俺の容姿はクラスに1人は居る平凡中の平凡、ああそ
ういや居たねこんな奴、と思われるのが宿命の地味顔だし。

いや待てよ。神様に頼んで超イケメンにして貰えれば良いんじゃね？

それだと、叶えてくれる願いの数が重要だよな。

少ない願いの一つで容姿を変えると、残りの願いだけじゃ辛いかも
知れないし。

ハイ・ティライトウォーカー
吸血鬼の真祖にして貰えれば死ぬことは無いだろうが、痛みは感じる。

俺はMじゃないから痛いのは嫌だ。

とりあえず、何個願い叶えてくれるか聞いてみるか。

「神様、願いって何個叶えてくれるんですか？」

「お前……順応能力高すぎだろ」

何の説明もしてないのに、と何故か複雑な顔をして呟く神様。

「チート転生の小説はよく読んでもしたから。説明しなくても理解しているって、楽で良いんじゃないですか？」

「確かに楽と言えば楽なんだが、説明してテンパってる奴を見るのも一つの楽しみなんだよ」

ワオ悪趣味

まあ俺もそういうの好きだナビ。でも……

「どっちかと言つて神様の方がいじられキャラっぽいような……」

おつと、”つっかり”心の声が漏れちゃったよ。聞こえたかな？
神様の方を見ると、

「俺がいじられキャラ……？」

聞こえてたっぽい。何か落ち込んでる（笑）

多分、部下の天使とか神様とかにいじられまくつてるんだろうな……

俺一応最高神なのに、とかブツブツ言つてるし。

「神様、落ち込んでるといつ悪いんですけど、とりあえず何個願い叶えてくれるか教えてくれません？」

アンタの私情なんで至極どうでも良いんで。

「どうでも良いって……お前、見た目からは想像つかないほど黒い
な

「読心術使わないで下さこ気持ち悪いです」

「つこに普通に悪口言つたし！俺そんにお前に嫌われる様な事したか！？」

「別に殴られてイラついたから精神的に攻撃してる訳じゃないですよ？」

「それが原因で俺こんなに傷付けられてんのか……？」

いやいや、外見で決め付ける事の愚かさを教えるための教育的指導だよ。

見た目は平凡、中身は悪魔。

「その名は、転生者カイト！」

ビシッと効果音が付きそうな感じで涙目（笑）な神を指差す。

「え、急に何？カイトって誰？」

「カイトは俺の名前に決まってんだろ」

「（つこに敬語ですら無くなつたな……）こや、お前の名前はカイトじゃなく「だつしゃああ！..」ゲフツ」

野暮な事を言おうとする神に飛び蹴りを食らわしてやつた。

浮いてるから勢い付けられないかと思つたけど、念じたら超スピードで移動できた。

てか、神様にも物理攻撃つて通じるんだな。

「転生するんだから名前くらい変えさせひ。あと俺が言つ願い全部叶えろ、神なんだから出来るだろ？」

「確かに出来るが、それと「拒否権は無いから。俺はアンタの暇つぶしに協力してやる立場だぜ?」……分かったよ、願いを言え。ちなみに転生させる世界は自由に選んで良いぞ」

「ふむ……さつき吸血鬼の真祖とか言つてたし、ネギまの世界にするか。

DBの方は女キャラが少なすぎる。

「じゃあ、転生するのは『魔法先生ネギま!』の世界な」

さて、どんなチート能力にするか……

「まず、不老不死にしてくれ。吸血鬼の真祖じゃなく、普通の不老不死。で、自由に肉体改造出来るように」

吸血鬼の真祖じゃないのは、色々と不都合な事があるかもしねないから。

まあ、自由に肉体改造が出来るって事は吸血鬼の真祖になる事も可能なんだけど。

「次に、身体能力は世界最強の存在を簡単に倒せるくらいで気と魔力は無尽蔵。そして、俺が知ってるアニメ、漫画、小説、ゲームの技を一次創作の技も含めて簡単に使えるように。もちろん『デメリット』や制限は全部取り除いてな。んで、武術や剣術、あらゆる武器が使えるように。魔法とか世界の国の言語とかのあらゆる知識も分かるように、アカシックレコード森羅万象も使えるようにな。最後に創造神の力と、鍛えたら鍛えただけ強くなる限界突破」

「チートだな……」

「原作ブレイクする為にはチート過ぎの位が丁度良いんだよ。滅茶苦茶にしてくるから楽しみにしてるよ」

「ああ、わかった。じゃ、能力付加すんぞ」

「え？」

神が俺に手のひらを向けると俺の体が光り出し、俺は体の中から力が溢れてくる事を自覚した。

「うおおお、みんな生きつけて生きただwww」

「よし、お前の願いは全部叶えたぞ。」

「サンキュー神様！」

願い全部聞いてくれたから再び神様に格上げだ。

「それと、転生後も俺とは念話で話せるからな」

「マジか。アフターケアもバツチリだな」

「まあ、暇だからな。そろそろネギまの世界に送るぞ」

「あ、出来れば原作の700年くらい前に送つて」

「何でだ？」

「力に慣れる為に修行したいし。そのあと吸血鬼にされたばっかりのエヴァに会いたいし」

「分かつた。せいぜい俺を楽しませてくれよ?」

「あいよー」

返事をした途端に俺の下に黒い穴が開き、俺は落ちて行つた。

「待つてろよネギまの世界!原作なんて粉々に打ち砕いてやるわ!
Let's 原作ブレイク」

そして俺はそこで大事な事に気付いた。

「イケメンにして貰うの忘れてた……！」

side 最高神

「普通の人間の物理攻撃が、神に通じる訳無いだろ……」

ボソリと呟いた俺の声は、誰かに聞かれる事もなく、何も無い真っ白な空間に消えた。

side out

ぱるー【神様はいじられキャラ】（後書き）

神様は多分、最後までいじられキャラのまま。

ちなみに神様の姿は一応イケメン。
残念なイケメンって奴です。

ここ！【使える技は使わにゃ損々】

やあ、前回神様に色々なチート能力を付けて貰つてネギまの世界に来たカイトだよ。

俺は今、テンプレな感じで結構高い所から結構な速さで地上に向かって落ちて行つてる。

さつき神様から来た念話によると、座標を少し間違えて高度1万メートル位に転移させてしまつたらしい。

どこが少しだ。本来なら神様から神に格下げしたい所だけど、何か俺が考えた技も使えるらしいし、フラグマンつていう素敵なオマケも付けてくれたらしいから許してやんよ。

まあ、高度1万メートルから落とされても全然平氣なんだけどな。舞空術使えるし。

フワリ

ストンツ

地面がかなり近付いてきた所で、俺は舞空術で勢いを殺してから着地した。

周りを見渡すと、木々が鬱蒼と茂つていた。どこかの森だろ？。

「さあ、と」

まずは姿を変えるか。

落下中に、肉体改造してイケメンになれば良いじゃん、と気付いた俺は早速肉体改造後の自分を思い浮かべようとする。が、上手く行

かない。

そもそも、イケメンにも色々なタイプが有る。イケメン、だけでは上手く肉体改造出来ないのだ。

平均的な顔立ちが一番美形らしいが、そんなもん分からんし。能力使えば分かるかも知れんが、面倒。

「んー……」

とりあえずナギよりは美形になりたいが、別のアニメのキャラをそのまま反映させるのも何か詰まらない。

「………そうだ、この手が有った」

俺は、具体的なイメージが無くてもランダムでイケメンになれる方法を思いついた。

まずは、その為の道具作りだ。

創造神の力を使い、何も無い空間から”ソレ”を作り出す。

「よし、出来た」

俺が作ったのは、一見何の変哲も無いコンパクト。
そう、コンパクトだ。

分かる方は居るだろ？数十年前に一世を風靡した、あの魔法少女のコンパクトだ。

母親の趣味で昔の少女漫画が大量に家に有り、暇つぶしで読んでた物がこんな所で役に立つとは。

本来、このコンパクトが変えるのは服装だけだが、俺の能力にそんな制限は存在しない。はず。とりあえず、試してみるか。

「テクマ マヤコン、テクマク ヤコン、ナギ・スプリングフィールドよりイケメンになれ~」

周りに誰も居ないからこそ出来る技だよな、これ。と思いながら呪文を唱えると、俺の体が光に包まれた。光が收まり、鏡を見ると……

「おお~」

そこには途轍もない美形が居ました。

髪と目の中の色は黒のままだが、髪は凄くサラサラになって、目は切れ長で鋭い。

眉は左右均等に整い、キリッとした雰囲気を出していて、鼻は高く、唇は薄い。

輪郭や耳の形まで美しく、完璧なパーツが完璧な配置をしている為、完璧な美形に仕上がっている。

ふと全身を見てみると、服装も変わっていた。

✓ネックTシャツにダメージジーンズという、前の俺なら普段から薄い影が更に薄くなつただろうシンプルな格好だ。それが、今の俺ならどうだろうか。

等身大の鏡を作りだし全身を確かめる。

「……想像以上だ」

美形は何を着ても似合つといつのは本当なんだな。

だが、俺の少し高い声は、今の顔にはあまり合っていない。

よし、声も変えるか。

外見は冷静沈着な感じだからな……置鮎さんの声にしよう。

どうやつて声を変えるかって？某キザな怪盗の特技を使うに決まつてるじやん。

簡単に咳払いをした時、背後の茂みが揺れた。

振り向くと、そこには巨大な熊が。明らかに俺を狙つてますね、分かります。

でもまあ、一丁度良い。初めての攻撃技は、某隊長のアレにしよう。創造神の力で刀を作り出して準備完了。俺は一本の刀を手に熊と対峙する。

では、あの技やつちやいますか。

「散れ、千本桜」

そう呟くと俺の持つている刀の刀身が消え、無数の花弁が目の前の熊をズタズタにした。

この技は、刀身部分が無数の刃となつて舞い散り、対象を斬り刻む。無数の刃が光に当たることで桜の花弁を思わせる。アカシックレコードで調べたからウイキペディアと同じ説明だと思う。

ちなみに俺のアカシックレコードはG.O.O.D.です。

まあ、そんな事は置いといて……」の声、カツ「良すぎだな。思わず顔がニヤけた。

（おい）

ん? 何か神様から念話來た。

（何? 今、酔いしれてるんだから邪魔すんなよ）

「のカツ「良い声に」。

下らない用だつたら『不死殺しの小枝の槍』^{ミスルティン}で突き刺す。

（つ……）

何か神様から息を呑むような声が伝わってきた。
あれ、今の突き刺すつてくだり聞こえてたか?

聞こえないように切り替えてるつもりなんだがな……まあ良いや。

（それで、何の用だ?）

（いや、何でお前ズタズタ状態の熊見て全然平氣そうにしてんだ? と思つてな……）

（は? 何でそんなこと聞くんだ?）

（……お前の精神をイジつた覚えは無いし、普通なら多少は動搖すると思つたんだが）

（……昔、色々有ったんだよ。他に用が無いなら切るぞ、じゃあな）

（あ、おい待て） プツツ

下らない用だつたから途中で切つてやつた。『不死殺^{ミストルティン}しの小枝の槍』で突き刺すのは面倒だからもう良いや。

ああ、ちなみにシリアルスな過去が有つたような言い方したけど、ぶつちやけそんな過去は無い。

俺はチート転生でよくある殺しの罪悪感に苛まれるのとか嫌だつたから、熊と対峙する直前に自分で精神いじつたんだよ。神様が自分で考えた技も使えるつて言つてたから、それを使って。何というご都合主義能力（笑）

まあ、前の世界での幼馴染がグロ好きで、そいつに付き合つてグロい映画みたりゲームしたりしてる内に慣れてたおかげで、元々グロには結構耐性が有つたけど。

なんでシリアルスな言い方したかと言つと、単に神様イジリだ。

神様は触れてはいけない心の闇に触れたと思つて、勝手に罪悪感に苛まれれば良いさ。ハーツハツハ！

まあそんな事より。

「流石、チートだな……」

口調が違うのは、外見＆声に合わせてね。

まあ、心の中は常に愉快な感じですが。

ただ周りに人が居ないと演じても無意味だから結構寂しい。神様は見てるつぽいけど、実感無いからな。

「俺は、何時まで一人なんだろうな……」

思わず溜息を吐きたくなる。

エヴァが吸血鬼の真祖になるまで後100年……その前に、ある程度修行を済ましたら街に行つてみるか。

……腹減つたな、熊鍋食べよつ。

side 最高神

自室に戻つた俺は、ネギまの世界に送つたカイトを観察していた。送る場所の座標を少し間違えたと言つたらカイトはキレかけていたが、咄嗟に別の事を伝えて事無きを得た。

伝えた事は2つ、まずフラグマンというオマケを付けた事、だ。ぶつちやけコレに関しては嘘だ、そんな能力付けてない。

ただ、アイツは自分で気付いていないだけで天然のフラグ乱立体质だから、バレる事はないだろう。

そして、自分で考えた技を使えるという事。これは本當だが、俺が与えた能力じゃない。

アイツの魂に刻み込まれた能力……ただ、アイツがこれに気付くのはまだ先の話だろう。俺が考え事をしてゐる間にカイトはいつの間にか無事に着地していたらしく、創造神の力を使って何かを作り出した。

「あれは……コンパクト?」

あれを使って、一体何をする気だらうか。

「テクマ マヤコン、テクマク ヤコン、ナギ・スプリングフィールドよりイケメンになれー」

どんがらがつしゃーん！

興味津津で見ていた俺は、カイトが唱えた言葉に思わずズッコけた。

「アツ ちゃんつて……イケメンつて……」

俺が体制を立て直して再びカイトに意識を移した時、カイト（本人の希望通りイケメンになっていた）は一本の刀を手に巨大な熊と対峙していた。

身長がカイトの倍程は有りそうな熊。

普通なら刀一本で挑むなど無謀だが、カイトにはそれでも勝てる能力がある。

一体どんな剣技で倒すのか、と俺は期待したが、カイトは予想の斜め上を行ってくれた。

「散れ、千本桜」

某隊長の声が聞こえたかと思えば、次の瞬間には熊はズタズタに切り裂かれていた。

その光景を見ていた俺は思わず呟いた。

「あの死神漫画の世界に送つても面白いかもな……」

まあ、そんな事は今はどうでも良い。それよりもカイトが心配だ。俺はアイツの精神 자체はイジつてないし、自分が生きる為とはいえ生き物を直接殺した事に動搖してるだろ？。俺がフォローしないとな。

だが、俺のそんな考えはカイトの顔を見た瞬間に砕け散った。

カイトは……恍惚とした表情で笑っていた。

その姿がまるで、大量の血に魅入られている悪魔のようにな見えて。

このままだとヤバい、と本能的に感じたのかも知れない。

俺は無意識に念話でカイトに呼びかけていた。

そしてすぐに、止めておけば良かつたと後悔した。

カイトは不機嫌そうに言った。酔いしれているのだから邪魔をするな、と。

思わず怯んでしまい、何に酔いしれているのか、と聞く事を躊躇つた。

だが、もしカイトが殺しに快感を見出しているなら、原作どこか世界を破壊してしまつのは無いか、と危惧した俺は、遠回しに聞いた。

何故ズタズタに切り裂かれた熊を見て全く動搖していないのか。カイトは答えた。昔、色々有つたのだ、と。

そして一方的に念話を遮断したカイトがポツリと呟いた言葉を、俺は聞き逃さなかつた。

「俺は、いつまで一人なんだろうな……」

ここまでカイトを見ていた俺は、疑問を持たずには居られなかつた。たつた一世過ぎしただけの人間界で、アイツの身に一体何が有ったのか、と。

side out

「ちー！【使える技は使わにゃ損々】（後書き）

主人公の意図の無い独り言にまで見事に振り回される神様。

シリアル？神様の勘違いだよ！

【肉体改造つて超便利】（前書き）

原作キャラは次話から出る……はず。
今回は別サイド無じです。

に！【肉体改造つて超便利】

「待ちやがれええええええええ！」

一 そう言われて待つ奴は相当の馬鹿だろうな

詰むとお出でよハ「ア」といひます、こんなにわ、こんなばんわ。

森の世界は来て100年経った田の場 僕は最初は居た森とは別の森で強面のお兄さんとの追いかけっこを繰り広げていま

何故いきなりこんな状況なのか、理由は簡単。

首だから。

こんな筈では無かつたんだがな……

俺は賞金首になりたくてなつた訳いやなし

ナギのアリカフラグ？知るか。

ネギが生まれなかつたら途轍もない原作ブレイクになるから良いじ
やん。

そもそも俺が原作ブレイクするのはハーレムを作る為だからな。俺
トランプはその過程で出来る。

まあとにかく、あれは只の事故だつた……

回想開始。

100年前、カイトがネギマの世界に来た翌日

「ふわ……あ」

ちょ、欠伸すら色氣の有るカッコ良い声に聞こえるつてどいつなの。これフラグマンのオマケが無くとも簡単に女子口説けそうなんだけど。

まあ、そんな事は置いといて。

俺は昨日の内に修行を開始するつもりだつたんだが、熊鍋を食つてから魔法の鏡で変わつたのは顔だけだと気付き、肉体改造で男の理想的な体型（180cm位の細マッチョ）になつたら満足して寝てしまい、気付けば朝だつた。

対熊戦も一応修行だという考え方も出来るけど千本桜始解しただけで終わつたし。

ちなみに熊の調理法は勿論アカシックレコードで調べた。熊肉つて個体によつて味が違うらしいが、俺が食つた熊は牛肉に似てて美味かつた。

まあ、そんな事も置いといて。半日以上も寝たから腹減つた。

「朝食にするか」

あの巨大な熊を一食で食べきる事は（やれりと思えれば出来ると思つが）していない。

つまり、熊の肉は残つてゐるのだが。

「——食連続熊肉は、な」

と思い、熊肉は俺の作った異次元空間に仕舞い込んである。温度も湿度も関係無いから腐る事も無いしな。

結局朝飯はどうするか。また新しい獲物狩るか？ 気を探る事も出来るようになつてゐるから、生き物探すのは簡単だし。よし、やつしょ。

とつあえず俺は、近くに感じる一番デカい氣を田指して歩き出す。しかし十歩程歩いた所で気付いた。

「瞬間移動……」

アレ使えば一瞬じゃん。

とこうか、俺に出来ない事つて多分無いから体力使う様な事する必要無いと思つ。

……行動に移る前に考えるか。

瞬間移動の後、かめはめ波で獲物を一撃。コレが楽だな。

額に人差し指と中指を揃えて当て、集中する。

獲物が居るのは多分、この森の中心辺りだうつな。このデカい氣を円で囲うように動物とか居るっぽいから。

カイト、行つきました！

ヒュンッ

「おおう……」

瞬間移動した先に居た獲物を見た俺は、かめはめ波を打つ前に呟いた。

「……予想Gジョウテス」

しまった、ついネタに走っちゃったよ。
流石にこのイントネーションだとカツコ良い声が残念な感じになるな。次から気を付けよう。

……現実逃避は止めるか。

今、俺の田の前には、裕に6メートル程はあるかという巨大な赤い物体。

全身が頑丈そうな煌めく鱗に覆われ、これまた頑丈そうな羽根と尾が生えた、ゲームや漫画の中でしか見た事のない生物。

どう見ても竜です、本当にありがとうございました。

「まあ、余裕で倒せるだろ？」「……」

だつて俺チートだし。

でも、竜って美味しいのか？

俺がここに来たのは朝飯の材料探しの為であつて、バトルの為では無いんだが。

「キシヤアアアアツツ！……」

とか何とか考へてる間に竜が奇声を上げて俺に襲いかかってきた。

チャララララーッ

どうする？

一いつげき

とく、とく

ぱうぎょ

にげる

何か電波なエンカウント音が聞こえてきたと思つたらコマンドが現れた。しかも竜は動きを止めている。

全部俺の仕業だけだ。

竜は俺がコマンド選択するまで行動できない。

これは時を止めてる訳では無く、ただ単に相手に、何となく動いちやダメな気がする、と思わせるだけだ。強いて言えば、精神的な拘束か。

ちなみに、俺がコマンド選択しても相手のターンにならないといつ鬼畜な仕様もある。

これを使つのは、ずっと俺のターンーと叫びたい時だけだが。

「あー……」

いい加減行動すべきだよな。腹減つたし。

えーっと……右手が上で、左手が下。

球を囲むように掌を向かい合わせにして、腰の右横で構えて氣を溜める。

「かめ～」

有言実行、かめはめ波で一撃必殺ってな。

一応食べてみたいから丸コゲにならない位には手加減するけど。

ちなみに声は野沢さんボイスだよ！

「マハンド選択？……とくせだな。

まあ、そんなに細かい事は気にすんなつて。

「は～め～

肉眼で見える程度まで圧縮した氣を、行動できない竜に向けて思いつきり放つ。

「波アアアア！」

ボツ

カツ

「……は？」

思わず固まってしまった。

俺がかめはめ波を放った先には、竜は愚か”何も”残っていなかつた。

あれ、おかしいな。

竜の後ろにはさつきまで森が広がつてたはずなんだけど。
俺の目には抉れた地面しか映つていない。

成る程……亀仙人が、はりきりすぎちつた!! テヘツ、と言つた時の心境はコレか。

俺はちゃんと手加減したつもりなんだけど、

呆然としていると、ふと左側から視線を感じた。

「あ、あ……」

見れば、怯えた目をした女人が地面に座り込んでいた。竜に集中しすぎて気付かなかつたけど、多分竜に襲われてた所だつたんだろうな。

にしても相当怖かつたんだろうな。まだ震えてるし。この人、結構美人だし安心させてあげないとな。

「こ、来ないで化け物！！」

俺が近付こうとすると、女人人はそんな事を言って後ずさつた。

んん？化け物？え、聞き間違いだよな。うんそうだそうに違いない。もしくは、まだ竜が消えた事を理解できて無いんだろう。

「いやああああつ！！！」

「え、あ、あ、ひょっ？」

安心させようと、ニシココリ笑つて声を掛けようとしたらい、悲鳴を上げて猛ダッシュで逃げられた。

今ので俺のガラスのハートは砕け散りました。

神に八つ当たりしてやる。

（おこ、おこー！）

（何だ？）

（何だじゃねーよー、フラグマンばばひじたんだよー、一口ボを使ひだい！）
ろか悲鳴上げて逃げられたんだがー！）

（……あの状況で一口ボなんて使える訳無いだろ）

（何でだよー！あの人、俺が竜を倒したから助かつたんだぞー！？）

（確かにそうだが、限度があるだろ。竜の後ろの森、10km位は
有つたんだぞ）

（……マジか）

（マジだ、じゃあ俺はやる事があるから切るぞ）

（はー、おこー！） プチッ

切りやがった……アイツ絶対やる事なんて無いだろー！

はあ……こしても、

「化け物か……」

女の人に言われると傷付く。

……能力、ちゃんと手加減出来るよ!にならないとな。

そして俺は修行を開始した。

回想終了。

あの後、俺の事がどう伝わったのか知らないが、気付いたら賞金首になつてた。

そりや森の一部を消し飛ばしたが、結果的には竜に襲われてた女人を助けたんだがな。

あの時の収穫は、此処が魔法世界だと分かつた事だけだ。
しかも、それも調べようと思えば簡単に調べられた事なので、結局は骨折り損のくたびれ儲けだった。

てか回想中に気付いたんだが、半径10キロもある森の中心に居たあの女人は何者だつたんだ?

……考えても仕方ないか、もう100年くらい前の事だし。

「は、ハツ、、ま、待て……！」

「断る」

さて、回想中もずっと追いかけっこを続けてた訳だが、賞金稼ぎの

方がバテてきて段々距離が開いて来ている。

俺は身体能力と一緒に体力が上がってるのか、体力の消費量自体下がってるのかは分からぬが全く疲れてない。

バヒュンッ

「！？はやつ……！」

疲れではないが、飽きてきたので一気にスピードを上げて賞金稼ぎを撒いた。

一人になつた俺は木の根に腰をかけ、考える。

今までは修行として賞金稼ぎの相手をしてきたが、もう十分能力の制御も出来るようになり、エヴァに会いに旧世界に行く予定の俺にとって、賞金稼ぎは面倒な存在でしかない。という事で。

「やうだ、容姿を変えよう」

これが一番手っ取り早く楽だ。

アカシックレコードで平均的な顔立ちも調べたから、今以上に美形になるはず。

ちなみに今回は、顔と体だけじゃなく髪と目の中の色も変えるつもりだ。

賞金首になつた俺の異名つて、『黒の死神』とか『漆黒の吸血鬼』とか黒に関するものが多いんだよ。

吸血鬼って呼ばれてるのは、多分俺の姿が全く変わつて無いから。この世界では吸血鬼以外に不老の存在は居ないと思われてるっぽい。

とにかく、早く姿変えて旧世界に行ひつ。

さん一【初めての原作キャラ】（前書き）

更新遅くなりました（ーー;）

エヴァ登場です！

さん！【初めての原作キャラ】

肉体改造で銀髪紅眼の超絶美形になり声も変えた俺は、現在旧世界に居る。

最初、エヴァはてっきり魔法世界の何処かに居ると思つてたんだが、アカシックレコードで調べたら旧世界に居る事が分かつたからな。

人間を無理やり吸血鬼にしてるなんて事が周りに知れたら、やっぱリマズいのだろう。

今日はエヴァの10歳の誕生日。
もう吸血鬼になってるはず。

エヴァの吸血鬼化は阻止しようと思えば出来たが、それをしなかつたのは……まあ、俺の我儘だ。

だつて美少女と一緒に旅するなんて素敵だろ？

まあ、エヴァが望めば元の人間に戻すし、吸血鬼として生きるとしても全力で守るけどな。

おっと、エヴァが屋敷から出てきた。見事に血まみれだな。
とりあえず接触するか。

第一印象が大事だよな。俺はエヴァの前に立ち、笑顔で話しかけた。

「こんにちわ」

俺の笑顔を見たエヴァの顔が、少し赤くなつた。

(ちよ、神様ーー！）ボ初成功だよ！しかも相手がエヴァだよーー。）

(あーあー、良かったな)

(やっぱ美形ってそれだけで得なんだな……ムカツクー。)

(今はお前も美形じゃねーか)

(肉体改造の一一番の利はイケメンになれる事だと、胸を張つて断言できるよ)

(わづかー)

(神様、今どうでも良いとか思つたろ)

(思つてねえよ)

(嘘つけ！読心術使つたら丸分かりだつてのー。)

(はーーおまつ、神相手に読心術なんて使つなよ)

(使つたなんて一言も言つてないけど？)

(ハーー)

(やつぱりでも良いとか思つたのか。神様が嘘つくなよ)

(すまん、で）ブチッ

言い訳なんて聞きたくない！って事で切つてやつた。やまあ。
ちなみに、このやつどつは一瞬の間の出来事だつたり。

あ、エヴァが口開いた。

「お前は……誰だ？」

!!!

エヴァは昔からこの口調だつたのか。貴族の令嬢だから少し高飛車
なのがもな……
だが、それでこのエヴァだ！

おつと、自己紹介しないとな。

「俺の名前はカイト・グレアム。しがない旅人だよ
ファミリー・ネームはまあ、適当に知ってる漫画に出てきた奴にした。
また口調が違うのは、俺の気分だ。

「何故、私に声を掛けた」

うん、疑問符が付いてない。
これは警戒されてるな……当然か。

血まみれの少女に話しかけるなんて、普通は躊躇うからな。
俺もエヴァじやなれば引け腰になつてたかも知れん。

俺は女子とは碌に話した事が無いから、何を話せばいいのか分から

ないし、自然と警戒が解けるまで会話しながら待つか。

「子供が一人で森を歩いてるのを見て、心配になつたから」

嘘は吐いてないよな、うん。でも我ながら泣かして。

俺の言葉に、エヴァが顔を歪めた。

あー、やつぱばれるわな。こんな白々しかつたら。
でもエヴァさん、その可愛い顔を不快気に歪められたら、凄く傷付
くので止めていただけませんか。

……「これは謝るべきだよな。

ドスツ

「つー？」

びっくりした。いやマジで。そして『氣まずい。

一体何が起つたかと訊つと、俺が謝罪の言葉を口にしようとした
瞬間、エヴァがタックルしてきた。

で、俺は咄嗟にエヴァを受け止めてしまつたといつ。
タックル仕掛けるほどに不快だったのか……
いやそれより、受けとめちゃつて、ゴメン。

エヴァ、何か震えてるし、顔は見えないけど怒つてるとだらうな。

「」までも怒らせてしまつては、謝罪の言葉も意味をなさないと思つ。

さて、どうするか。

暫く無言で考えていると、エヴァが腕で腹の辺りを締め付けてきて、思わず顔が引きつった。

服に血が付くとか、いくら吸血鬼になつて力が強くなつても、俺を絞め殺す事は無理だと、そういう事ではなく。

口りもイケる俺としては、男のシンボルがアレな感じになりそうで。ぶっちゃけヤバい。

状況は美味しいが、変態として避けられるのは嫌だ。

俺は降参の意を示す為にエヴァの背中を何回か軽く叩いた。

だが、エヴァは離してくれない。といつか動かない。

不審に思つて様子を伺えば、エヴァの目は両方とも閉じられていた。

え、これつてアレか。あまりに不快すぎて氣絶したのか。

いやいや、今の俺は超絶美形だし、そんなはずは……元々は平凡だつたし、断言出来ないな……

もしそうなら俺、ショックで死ねそうだ。

side ハヴァンジエリン

分からない。なんで私がこんな目に遭わなければならぬんだ。
分からない、わからない、ワカラナイ……

何もかもが突然だつた。

私の10歳の誕生日、目が覚めたら私はもう化け物にされた。

不老不死で、人の血を吸う化け物。

吸血鬼。

私を化け物にした魔法使いは、もう殺した。

素手で心臓を一突き。初めて人を殺した事には、何の感情も抱かなかつた。

それどころか、大量の返り血を、飲みたい、と一瞬でも思つてしまつた。

それは普通の人間なら、思つはずの無い事。

やはり今の私は化け物。

そこからは覚えてない。気付けば私は屋敷の外の森に居て、目の前には銀髪に紅い眼の、まあ……なかなか整つた容姿をした男が立つていた。

男は私と目が合つと、笑つて私に話し掛けてきた。

「じんにちわ」

笑つた顔も予想通りといふか何といふか、まあとにかくアレで、私は頬が熱くなるのを感じた。

だが、血まみれの私に話し掛けるなど、絶対に普通じゃない。

「お前は……誰だ？」

私が聞くと、男は一瞬目を見開いた後にまた笑った。

「俺の名前はカイト・グレアム。しがない旅人だよ」

カイト、カイトか。中々に良い名ではないか。

しかし旅人だと？奴隸商人ではないのか……いや、奴隸商人には到底見えんが。

本当に奴隸商人で無いのなら、何故。

「何故、私に声を掛けた」

奴隸商人ならば、私を闇オークションにでも出すだろう。
では旅人ならば？

「子供が一人で森を歩いてるのを見て、心配になつたから」

私は泣きたくなつた。どうせ下心が有るのだろうと思つていたから。
だが、カイトの目は嘘を吐いてるようには見えなかつた。

子供とはいえ血まみれの私を、心配したという。

カイトは、私が化け物だという事を知らない。知つたらきっと私から離れて行く。

でも、今だけ。少しの間だけ、甘えたいと思った。

私はカイトに抱きついて、泣いた。

カイトは何も言わずに私の背中を優しく叩いてくれて、その心地よさに私は眠ってしまった。

side out

さん！【初めての原作キャラ】（後書き）

二人とも勘違い。

主人公は割とマイナス思考です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2479n/>

Let's 原作ブレイク

2010年12月9日13時39分発行